

世界大学ランキングの動向と課題

渡部 由紀

要 旨

世界大学ランキングが始まって、間もなく10年が経過する。ランキングは技術的な問題点を指摘されながらも、大学の「質」を評価する一資料として広く利用されるようになり、その存在感を増している。しかし、既存のランキングが知識基盤社会を支える多様な高等教育システムの発展に与える影響を懸念し、新たなランキング・ツールの開発も始まっている。本稿では、文献調査を用い、5つに類型化されたランキングの特徴を検証し、近年の世界大学ランキングの動向と課題を分析する。ランキングは、大学のエクセレンスを一元的な基準で包括的に評価するリーグテーブルから、大学のパフォーマンスを多面的な視点で捉え、大学の多様性に応じた比較へと変化してきている。しかし、世界の多様な高等教育システムを多面的に比較できるデータの不足が大きな課題となっている。高等教育市場のグローバル化が進む中、日本の大学や政府は、日本の大学のパフォーマンスの国際的な発信力が問われている。

【キーワード】世界大学ランキング、リーグテーブル、評価指標

1. はじめに

2003年に最初の世界大学ランキングが上海大学で発表されてから、世界大学ランキングへの注目は高まる一方である。知識基盤社会への移行により世界的に進学需要が高まり、また、高等教育市場のグローバル化が進む中、学生や研究者のみならず教育プログラムの世界的な流動性が高まっている。高等教育を取り巻く環境が急速に変化する中、世界大学ランキングは学生の進学先選択の情報源として、また国際的通用性や評判の向上、国際的競争力の強化が一主要課題となった大学では、大学施策の決定資料として利用されるようになってきた。OECDの高等教育機関管理プログラム（IMHE – Programme on Institutional Management in Higher Education）により実施された高等教育機関のリーダーとシニア・マネジャーを対象としたリーグテーブルとランキングに関する質問調査では、63%がランキング結果に対して、戦略的、組織的、経営的、または学術的行動を取ったと回答している（Hazelkorn 2008, p.199）。

国境を越えた高等教育市場の競争が高まり、世界大学ランキングは大学の「質」を比較する情報という役割を担おうとしている。その一方で、世界大学ランキングに関する研究が進み、ランキングの技術的な問題点だけでなく、ランキングが高等教育システムに及ぼす影響も指摘されている。ランキングの影響の大きさは、2010年にヨーロッパ研究大学連盟（League of European

Research Universities) が大学の国際的なランキングについてアドバイザー・ペーパーを出したことや、2011年に日本の研究型大学の学術懇談会 RU (Research University) 11⁽¹⁾ が THE 世界大学ランキング (The Times Higher Education World University Rankings) に対して評価方法の改訂を求める声明文を出したことから伺える。

大学ランキングの質が問われ始め、2004年にユネスコ・ヨーロッパ高等教育センターと米国の高等教育政策研究所により IREG (国際ランキング専門家グループ: International Ranking Expert Group) が結成され、2006年に大学ランキングの実施ガイドライン「高等教育機関のランキングに関するベルリン原則」(以下ベルリン原則) が策定された。その後、新たなランキングも出てきており、大学の国際比較の在り方は多様化してきている。本稿では、文献調査に基づき、世界大学ランキングの近年の動向と問題点を整理する。

2. 世界大学ランキングの分類

表1 国際的な大学ランキングの分類

種類	ランキング		ランキング提供者	開始年度
大学総合 ランキング: 研究型大学 リーグテー ブル	ARWU 世界大学学術ランキング (Academic Ranking of World Universities)	500 位	上海ランキングコンサル ティング/上海交通大学	2003 年～
	THE 世界大学ランキング (The Times Higher Education World University Rankings)	400 位 ⁽²⁾	タイムズ・ハイヤー・ エデュケーション (THE)	2004 年～
	ランキングのための情報提供・分析の提携機関 2004～2009 年: クアクアレリ・シモンズ (QS) 2010 年～現在: トムソン・ロイター (TR)			
	QS 世界大学ランキング (QS World University Rankings)	700 位	クアクアレリ・シモンズ (QS)	2004 年 ⁽³⁾ ～
研究力 ランキング	Performance Ranking of Scientific Papers for World Universities	500 位	台湾の HEEACT (高等 教育評鑑中心基金會)	2007 年～
	ライデン・ランキング	500 位	オランダのライデン大学	2008 年, 2010 年
	Assessment of University-Based Research (AUBS)		欧州委員会	2010 年に研究の多 面的な評価手法の 提案
多面的な大学 ランキング	CHE エクセレンス・ランキング		ドイツの CHE (高等教育開発センター)	2007 年, 2009 年, 2010 年
	Multidimensional University Ranking System (U-Multirank)		欧州連合	2011 年 6 月 パイ ロット・スタディー 終了
学習成果評価	高等教育における学習成果の評価 (AHELO: Assessment of Higher Education Learning Outcomes)		経済開発機構 (OECD)	フィージビリティ・ スタディ実施 (2010-2012 年)
ウェブ上の 情報供給量 ランキング	Webometrics Ranking of World University	12,000 位	スペインの国立研究評議会 (CSIC) のサイバーメト リック・ラボ	2004 年～

Raaghvargers, A. (2011). "EUA Report on Ranking 2011: Global University Rankings and Their Impact." The European University Association を基に筆者作成

一口に世界大学ランキングと言っても、その評価の目的も、対象も、手法も様々である。欧州教育協会の世界大学ランキングの調査報告書“EUA Report on Ranking 2011: Global University Ranking and Their Impact”では、15の国際的な大学ランキングの調査方法を分析し、5種類に分類している。表1は、そのうち主要な10の大学ランキングをまとめたものである。5分類されたランキングの特徴を検証しながら、近年の動向を分析する。

2.1 大学総合ランキング：研究型大学リーグテーブル

最も広く認知されているランキングの種類は、ARWU (Academic Ranking of World University) 世界大学学術ランキング、THE 世界大学ランキング (The Times Higher Education World University Rankings)、QS 世界大学ランキング (QS World University Rankings) などの大学総合ランキングで、世界の研究型大学のリーグテーブルを発表しているランキングである。

最初に上海交通大学の ARWU 世界大学学術ランキングが 2003 年に発表された。このランキングの当初の目的は中国で世界レベルの大学の育成に向けてのベンチマーキングであったが、ランキング結果がウェブ上で公表されると世界中から注目が集まる結果となった (Wildavsky 2010)。翌 2004 年には、イギリスのタイムズ・ハイヤー・エデュケーション (THE) が、高等教育のマーケティング・情報企業であるクアクアレリ・シモンズ社 (QS) と提携し、THE 世界大学ランキングを発表した。2010 年からは、THE は国際的な情報企業で、学術文献データベース、ウェブ・オブ・サイエンスを持つトムソン・ロイター社 (TR) と提携した。ランキングの名称自体は THE 世界大学ランキングで変化はないが、実質的には 2004 ～ 2009 年までは THE-QS 世界大学ランキングで、2010 年からは THE-TR 世界大学ランキングに変わったことになる。

THE とのパートナーシップを解消した QS はこれまでのランキング手法を継続し、QS 世界大学ランキングとして発表している。また、国内大学ランキングの先駆者である U.S. News & World Report は QS と提携し、QS のデータをもとに World's Best University を発表し、世界大学ランキング事業に乗り出している (Wildavsky 2010)。

この種のランキングは、世界のエリート研究型大学のリーグテーブルの公表が主目的であるため、各評価指標のスコアをウェイトづけした総合スコアを算出し、それを基に大学をランクづける (Rauhværers 2010)。リーグテーブルという一見して大学の順位が読み取れるわかり易さでこれらのランキングが世間で広く受け入れられているが、その結果の信憑性については、評価指標の妥当性や評価スコアの算出方法の技術的な問題点が指摘されている (Billaut, Bouyssou, & Vincke 2009, Rauhværers 2010, Usher & Savino 2006, 小林, 曹, 施 2007)。

表2は、3つの総合大学ランキングにおける評価指標の一覧である。大学のパフォーマンスの同じ側面を評価するのに使用されている指標は様々であり、その指標数も異なることがわかる。

教育の評価を例にとると、ARWU 世界大学学術ランキングが使用している指標は1つで「ノーベル賞、またはフィールズ賞を受賞した卒業生数」というアウトカム指標、QS 世界大学ランキングは2つで「学生対教員比率」というインプット指標と「雇用者による評判調査」という評判指標、THE 世界大学ランキングは5つで「学生対教員比率」「教員一人当たりの大学の収入」というインプット指標、「教員一人当たりの博士授与数」「学士授与数対博士授与数の比率」というアウトプット指標、「教員による評判調査」という評判指標で、3つのランキングに共通する指標は一つもない。また一口に教育の質の評価と言っても、教育のインプットを評価しているものもあれば、アウトプットを評価しているものもあり、質の捉え方はまちまちである。

さらに二つのランキングではたった一つか二つの指標で評価しており、大学の教育の質について言及することの妥当性に疑問が残る。ARWU が使用している「ノーベル賞、またはフィールズ賞を受賞した卒業生数」は、指標そのものが教育の質を評価する指標として問題がある。

この種の大学ランキングの評価指標のもう一つの問題点は、大学の研究面の評価に大きく偏っていることである。大学という複雑なシステムを評価するにあたり、大学の研究、教育、国際性、イノベーションなど様々な面に関する評価指標を用いているが、研究に対する比重が極端に大きい。ARWU 世界大学学術ランキングにおいては研究を評価する指標が80%、THE 世界大学ランキングと QS 世界大学ランキングにおいては60%を占めており（表2）、多様な役割を担う大学のパフォーマンスを評価しているとは言い難い。また、知識基盤社会への移行により、高等教育が大衆化の段階に入り、多様な高等教育システムの構築の必要性が指摘されている。しかし、この種の総合大学ランキングがもたらす「大学のエクセレンス＝研究型大学」という一元的な大学のプロフィールが、大学システムの多様性を減退させる危険性が懸念されている（Boulton 2010）。

表2 総合世界大学ランキングの評価指標の比較

	ARWU 世界大学学術 ランキング 2011		THE 世界大学ランキング 2011-2012		QS 世界大学ランキング 2011/2012	
評価指標数	6		13		6	
研究力	ネイチャー誌とサイエンス誌の論文数	20%	研究費収入 (教員一人当たり)	6%		
			論文数(教員・研究者一人当たり)	6%		
研究の評判			教員による評判調査	18%	教員による評判調査	40%
研究のインパクト	ISI の自然科学論文引用インデックスと社会科学論文引用インデックスの被引用論文数	20%	被引用数(論文一本あたり)[標準化—学問分野の違いの調整・地域補正]	30%	被引用数(教員一人当たり)	20%
教員の質	ノーベル賞、またはフィールズ賞を受賞した教員数	20%				
	21 の領域分野において引用率の高い研究者の数	20%				
教育の質	ノーベル賞、またはフィールズ賞を受賞した卒業生数	10%	学生対教員比率	6%	学生対教員比率	20%
			博士授与数(教員一人当たり)	2.25%		
			学士授与数対博士授与数比率	4.5%		
			大学の収入(教員一人当たり)	2.25%		
教育の評判			教員による評判調査	15%	雇用者による評判調査	10%
国際性			外国人数員比率	2.5%	外国人数員比率	5%
			留学生比率	2.5%	留学生比率	5%
			国際共著論文比率	2.5%		
イノベーション・知識移転			外部資金(教員一人当たり)	2.5%		
その他	規模：各指標のスコアの合計/教員数	10%				

2.2 研究力ランキング

二種類目のランキングは、大学の研究パフォーマンスに焦点を絞ったランキングである。台湾の HEEACT（台湾高等教育評鑑中心基金會：Higher Education Evaluation and Accreditation Council of Taiwan）のランキングとライデン・ランキングは、学術論文数と被引用数に関する指標でランクづけしている。台湾の HEEACT は、8つの評価指標のスコアをウェイトづけした総合スコアによりランクづけしているが、ライデン・ランキングは、5つの評価指標ごとにランキングを行い、総合ランキングは行っていない。

これら二つのランキングは、大学の研究力を評価するのに学術論文数と被引用数というビブリオメトリック指標のみに基づいた研究の生産力と質・影響力を検証している。こうした既存のランキングが描く大学の研究とその社会的貢献についての単純化した解釈が政府や大学などの研究施策等の意思決定に及ぼす影響を懸念し、欧州委員会における Assessment of University-Based Research (AUBS) では、評価の目的に応じた多面的な評価指標の開発を始めた。AUBS の目的は大学のランキングではなく、既存の世界大学ランキングの研究の評価指標を分析し、大学における研究を多面的に評価するための指標の提案にある (Expert Group on Assessment of University-Based Research European Commission 2010)。

2008年に始まったこのプロジェクトは、2010年の最終報告書“Assessing Europe's University-Based Research”で研究評価の目的に適した評価指標を定める多面的な研究評価のマトリックスを提案している。まず何の目的で研究を評価するのかを明確にし、次に研究評価の目的に適した指標を選定する。研究評価の目的は、資源配分、研究ミッションの差別化の促進、地域社会への参加、研究パフォーマンスの向上、コスト・ベネフィット評価、国際協力の促進、学際的研究の増加の8つである。そして、5分類された41の評価指標から、研究評価の目的に適した指標を選択できるようになっている。評価指標の5つの分類は、研究の生産力、質と社会への影響、イノベーションと社会的便益、持続可能性と規模、インフラストラクチャーとなっている。

2.3 多面的な大学ランキング

3種類目のランキングは、大学のエクセレンスにある特定のタイプの大学（自然科学、工学、医学系に強い研究型大学）に有利な指標で評価する既存の大学ランキングを懸念し、多様な大学システムをより多くの多面的な評価指標を用いて、ユーザーのニーズに合った大学の様々なパフォーマンスのエクセレンスを捉えようとするランキングである。この種のランキングは、各指標のスコアをウェイトづけし、合計した総合スコアでランクづけしたリーグテーブルは提示せず、各指標の結果、または評価指標の分類別の結果を公表する。

まず、ドイツの CHE（高等教育開発センター：Center for Higher Education Development）が2007年に発表したエクセレンス・ランキングがある。これまでに、改良を重ねながら、2007年、2009年、2010年と3回発表している。このランキングは、欧州地域の大学の7つの学術分野（生物学、化学、数学、物理学、政治学、経済学、心理学）の大学院の比較である。大学を一つのシステムとして評価するのではなく、学術分野別の大学のパフォーマンスを評価する。評価方法は2段階になっており、最初に7つの学術分野において、6～8の研究と国際性に関する指標により“エクセレント・グループ”を選定する事前選考を行う。この事前選考で、各学術分野において約60程度の大学院が選ばれる。次に“エクセレント・グループ”に選ばれた大学院において機関データに関する質問調査と学生による学習状況評価の質問調査を行う。そして、評価方法はランクづけではなく、

各評価指標において規程の水準を超えると星を与える星取り表となっている。

評価結果の提示方法は、7つの学術分野別に各大学院が、事前選考、機関の質問調査、学生の質問調査でそれぞれいくつ星を取ったかが表示される。大学院はアルファベット順に並んでいるが、上記3つの評価次元ごとに、獲得した星数の多い順に並べかえることが可能である。また、リストから3つまで大学院を選び、比較することができる。この比較表では各大学の修士・博士課程のプログラムの基本的な内容まで比較ができる。

エクセレンス・ランキングは、より多くの評価指標と多様な評価手法で詳細な大学の比較を可能にしている。しかし、エクセレンス・グループの事前選考において使用されている評価指標はこれまでの総合大学ランキングと同様、研究重視と言える。しかし、このランキングが大学院に限定されていることを考慮すれば、研究パフォーマンスが優先されることの妥当性を否定はできない。エクセレンス・ランキングは、欧州の大学院への進学を考えている学生にとって、大学院選びの有効なツールであると言えるだろう。

次に、世界規模の多面的な大学ランキングに、欧州連合が進めている U-Multirank (Multidimensional University Ranking System) がある。U-Multirank は、ユーザーが自分の目的に応じて、大学をその多様な機能について比較するためのオンラインツールの開発を目指している。大学機関 (部局) と学術分野 (プログラム) の2つのレベルで、大学の5つの機能 (教授と学習、研究、知識移転、国際性、地域社会への参加) の評価を基にランキングする。ランクづけは評価指標ごとで、順位づけではなく、上位、中位、下位グループの3つのレベルで提示される。大学のパフォーマンスをどの次元で、どの評価指標で比較するかはユーザー自身が選択する。またランキングは比較可能な大学、または特定の学術分野の部局 / プログラムの中で行われる。例えば、大学のミッションが全く異なる大学を比較することはできない。

U-Multirank は、2011年6月にフィージビリティ・スタディーが終わり、最終報告書が出された。パイロット・テストの結果、U-Multirank を欧州内で実施することは実現可能だが、短期間に世界レベルで展開するのは難しいことがわかった。その原因は、比較可能な客観的データを集めることが難しいことにある (van Vught & Ziegele 2010, p.21)。

2. 4 学習成果評価

4種類目のランキングは、高等教育の成果の直接的指標である学生の学習成果を世界的に比較する OECD による AHELO (Assessment of Higher Education Learning Outcomes: 高等教育における学習成果評価) である。既存の大学ランキングは大学の教育の質を教員一人当たりの学生数といった学習環境や就職や学位課程修了実績などの間接的な指標で評価しているが、AHELO は学生の学習の質と妥当性の評価であり、大学の教育の質を直接的指標で評価することになる。深堀 (2008) は、新たな高等教育の質の評価のツールとして AHELO が開発される背景には、世界的に高等教育の大衆化により出口段階での教育の質保証への関心が高まっていること、またグローバル化の影響が高等教育にも及ぶ中、多面的で包括的な高等教育機関の国際比較の実施への関心が高まっていることを挙げている。

AHELO で評価される学習成果は一般的技能と専門的技能である。専門的技能に関しては、工学と経済学の二分野に限られている。また、学生、教員、大学または学部を対象に、学生の経歴、既習の知識や技術、ティーチングの資源や質等の学習背景に関する質問調査票も評価の際に用いられる。また、入学時から卒業時の学習差異も評価指標の一つとして挙げられているが、測定す

る調査手法とツールについては今後の検討課題となっている。2010年からフィージビリティ・スタディが始まり、2012年末に結果についての協議が行われる予定である。

2.5 ウェブ上の情報供給量ランキング

5種類目のランキングは、スペインの国立研究評議会（CSIC: the Consejo Superior de Investigaciones Científicas）のサイバーメトリック・ラボが、2004年から半年に一度公表している世界の大学のウェブの影響度ランキングである。このランキングは、アカデミック・コミュニティにとってのウェブの重要性を示すことを目的としており、世界の大学の様々な学術活動をウェブ上の情報量と認知度で評価する（CSIC 2011）。評価指標は4つで、情報量は、大学のウェブのページ数、リッチファイル数、論文数・被引用数の3指標、そして、認知度は外部のリンク数の1指標となっている。このランキングの特徴は、他のリーグテーブル型の大学ランキングに比べ、ランク付けされる大学がはるかに多いことである。400～700位までのランキングが通常であるが、CSICのランキングは12,000位までである（Rauhvarers 2010）。2012年1月に発表されるランキングからは20,000位までランクづけされる予定である。

3. 世界大学ランキングの動向と課題

5つのタイプの世界大学ランキングを検証することにより、多様化する世界大学ランキングにおいて二つの主な動向が見えてくる。まず、世界大学ランキングは大学の「質」を一つの数字で表現した、わかり易いが簡略化されすぎたと言えるリーグテーブルから、異なるタイプの大学の多様な機能を比較するための情報ツールへ変化してきている。

ARWU、THE、QSといった世界大学ランキングの先駆者は、小林他（2007）が述べている市場型評価の特徴を概ね反映している。評価主体が民間機関であり、市場価値のある情報をランキングという数量化されたわかりやすい形式で提供する。大学を一つのシステムとして評価し、その結果をリーグテーブルという一見して大学の序列がわかる形式で情報を提供する。そのために大学のパフォーマンスを検証する各評価指標のスコアを算出し、それらをウェイトづけしたものを合計した総合スコアを算出するわけである。Rauhvarers（2011）は公表されたスコアは、評価指標そのものの値打ちではなく、数理的操作の結果であると述べている（p.13）。また、これらの世界大学ランキングの評価主体によって選択された評価指標は、その数は限られており（6～13）、また研究に偏っていて、ランキングの対象は研究型大学に限られる。これらのランキングは、世界のトップ研究型大学のリーグテーブルであり、それは世界に現存する大学の1～3%に過ぎない（Rauhvarers 2011, p.13）。

近年新たに開発されている世界大学ランキングは、大学のエクセレンスを一元的な指標で包括的に評価するリーグテーブルを問題視し、大学のパフォーマンスを多面的な視点で捉え、大学の多様性に応じたエクセレンスを比較するシステムである。これらのランキングは総合スコアを算出せず、各評価指標、または指標をグループにした評価次元ごとに評価得点、またはレベル（上位、中位、下位）を表示する。大学のパフォーマンスを多面的に評価するため評価指標数が多く、ユーザーによって異なるランキングの使用目的に適した大学の比較評価を可能とするシステムを目指している。また、同種類のものを比較評価してこそ意味があるというスタンスに立っている。この種のランキングの開発を行っているのは欧州の公共機関であり、高等教育の多様性を活かした

欧州高等教育圏の確立を目指しているという背景がある。

次に挙げられる近年の動向は、大学のパフォーマンスの評価指標の変化にある。まず、ビブリオメトリック指標のみに基づいた大学の研究の評価の在り方が問われ始めた。大学の研究の評価は主に学術論文数と被引用数というビブリオメトリック指標に基づいて検証されてきた。しかし、研究が社会に与える影響を測るにはそれでは不十分である。また、ビブリオメトリックデータそのものに問題もある。現在は二つの民間企業のビブリオメトリックデータ、トムソン・ロイター社のウェブ・オブ・サイエンスとエルセビア社のスコパスが存在するのみであり、学術誌や被引用データに学術分野、また地域的な偏りがあることは広く指摘されている（Vught & Ziegele 2011, p. 27）。さらに樫木（2011）はビブリオメトリックデータによる評価対象期間が研究の在り方に影響を及ぼしかねない問題を指摘している。THEのような市場型評価の世界大学ランキングは研究評価の際に、主に5年間と言う短い期間に引用される論文のみを対象としている。研究の成果は通常認められてから引用されるまでにタイムラグがあり、これらのランキングで即効性のあるインパクトを生む研究のみがカウントされることにより、長期的に大きな成果を生む研究の芽を摘み取る危険性を孕んでいることを指摘している（樫木 2011, p. 3489）。

知識基盤社会において、大学が経済発展のエンジンであるという認識が高まる中、大学は研究・教育・イノベーションの相互作用を導くことがこれまで以上に期待されるようになった。質の高い教育やイノベーションを提供するためには、研究の生産性や質をどう評価すべきなのか。2010年に最終報告書で提案されたAUBSの多面的な研究評価のマトリックスは、評価の対象と目的に適した評価指標と評価手法を選ぶことの重要性を強調し、41の多様な評価指標を提示している。

評価指標の変化は、大学の研究面だけではない。グローバル化する知識基盤社会を支える人材の育成問題と獲得競争が明示的になり、大学の教育の質への世間の関心が高まり、大学の教育パフォーマンスの評価の必要性が言われるようになった。教育の質の評価は、これまでは教員一人に対する学生数や博士授与数などの国際的にデータ収集が可能な間接的な指標が中心であった。しかし新たに開発されているランキングや評価ツールでは、教育の質を学習者の視点から評価できるように、新たに学生質問調査を評価指標に取り入れて、指標を多様化する試みや、教育の直接的なアウトカムを検証する学習成果の評価の試みが始まっている。

こうした動向は、大学ランキングの質と実施に関する16の原則を示した「ベルリン原則」に沿ったものだと言える。2006年にこの原則を策定したIREGは、2010年に大学ランキングの審査を実施することを発表し、2011年11月に審査の基準や手順をまとめた「IREG Ranking Audit Manual」が採択され、2012年よりランキング審査を開始する。2012年1月末が最初のランキング審査への応募締切となっている。審査項目は、1) ランキングの目的、対象者、基本的な取り組み姿勢、2) 評価手法、3) 結果の公表と提示、4) 透明性と応答責任、5) 質保証に関する20項目である。この審査はベルリン原則に基づき、ランキングの透明性と質を向上し、またランキングのユーザーに信頼性のあるランキングを見分けるツールを提供することが期待されている。今後、世界大学ランキングがグローバル化する高等教育市場から姿を消すことは考え難い。多様な高等教育システムの発展を促し、ユーザーにとって有用な大学ランキングを育むランキングの評価システムの開発と発展は今後の課題と言える。

妥当で信頼性の高い世界大学ランキングに関してのもう一つの大きな課題は、高等教育に関する国際的に比較可能なデータの不足である。欧州委員会は、EUMIDA Projectとして知られる欧州の大学のマイクロデータ収集のフィージビリティ・スタディを行った。U-Multitrackの最終報告書では、

EUMIDA Project のフォローアップ・スタディを行い、欧州の高等教育のデータシステムを確立することの重要性が述べられている (van Vught & Ziegele 2011, p.156)。また、このシステムが全米の高等教育機関を対象とした包括的なデータベース IPEDS (Integrated Postsecondary Education Data System) のような世界各国の高等教育のデータシステムとの関連性を明確にして構築されることが重要であると指摘している。

4. おわりに

近年の世界大学ランキングブームの背景には、高等教育市場のグローバル化により、世界の大学を比較する情報へのニーズが高まっていることがある。海外へ留学する学生数は既に 300 万人を超え、2025 年にはその数が 700 万人を超えるという予想も出ている (Böhm, Meares, Pearce, Follari & Hewett 2003)。教育は高額な投資であり、大学の評価がわかりやすい総合大学ランキングが世間に広く認知されるようになった。大学もまた、優秀な学生や研究・教育において国際的に協力できるパートナーの獲得のために、世界大学ランキングを大学の宣伝材料として利用することが、世界大学ランキングの社会的地位を向上させている。

社会が世界大学ランキングを数少ない情報源として、その存在と有用性を認めているのは事実である。しかし、その情報の信憑性をランキングの利用者が的確に評価するのはきわめて難しい。小林他 (2007) は、ランキングの評価主体者がランキングの妥当性を専門家に検証させ、その評価基準を見直すという自助努力を見せることにより、ランキングが正当化され、その権威を増していくという問題点を指摘している (p. 59)。

2012 年に始まる IREG 大学ランキング審査が、大学ランキングの質の客観的なツールとなることに期待がもてるが、大学、また高等教育政策の関係者は、世界大学ランキングとどう向き合っていくかが問われている。地域での高等教育圏の構築を目指している欧州は、世界大学ランキングの存在を否定するのではなく、共存していく施策を打ち出している。欧州の大学の質を自らの手で正確に世界に発信する取り組みを実施している。日本の大学や高等教育政策関係者も、日本の大学の情報を国際的に発信していく必要がある。個々の大学の活動に関する発信はもちろんだが、世界の大学と比較可能な高等教育のデータベースシステムの開発が必要不可欠である。

注

- (1) RU (Research University) 11 は平成 21 年 11 月に設立された日本の研究型大学のコンソーシアムで、正式名称は「学術研究懇談会」。現在、北海道大学、東北大学、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、筑波大学、東京工業大学の 11 大学によって構成されている。
- (2) 2010 年までは、200 位までの発表であったが、2011 年から 400 位まで発表されるようになった。但し、200 位までは順位づけされているが、201 位から 300 位まで 25 位ごと (201 - 225 位、226 - 250 位、251 - 275 位、276 - 300 位)、301 位から 400 位までは 50 位ごと (301 - 350 位、351 - 400 位) のランク分けとなっており、総合点は発表されない。
- (3) 2004 年までは QS は THE 世界大学ランキングで、データの提供と分析を行っていたが、2010 年より THE とのパートナーシップを解消し、QS 世界大学ランキングとして発表を開始。

参考文献

- (1) Academic Ranking of World Universities-2011 (2011). Retrieved October 10, 2011, from: <http://www.shanghairanking.com/ARWU2011.html>
- (2) Billaut, J., Bouyssou, D. and Vincke, P. (2009). Should you believe in the Shanghai ranking? An MCDM view, *Scientometrics*, 84 (1), pp. 237-263 Retrieved October 10, 2010, from: http://hal.archives-ouvertes.fr/docs/00/40/39/93/PDF/Shanghai_JCB_DB_PV.pdf
- (3) Böhm, A., Meares, D., Pearce, D., Follari, and M., Hewett, A. (2003). *Global Student Mobility 2025: Analysis of Global Competition and Market Share*. Canberra: IDP Education Australia.
- (4) Boulton, G. (2010). *University Rankings: Diversity, excellence and the European initiative*. League of European Research Universities.
- (5) CHE (2010). *Identifying the Best: The CHE Excellence Ranking 2010*. Working Paper No. 137. Retrieved July 1, 2010, from http://www.che.de/downloads/CHE_AP137_ExcellenceRanking_2010.pdf
- (6) CSIC (2011). *Ranking Web of World Universities*. Retrieved October 10, 2011, from: http://www.webometrics.info/about_rank.html
- (7) Expert Group on Assessment of University-Based Research European Commission (2010). *Assessing Europe's University-Based Research*. Belgium: European Union.
- (8) Hazelkorn, E. (2008). Learning to Live with League Tables and Ranking: The Experience of Institutional Leaders, *Higher Education Policy*, 21, pp. 193-215.
- (9) IREG (2011). *Ranking Audit Manual*. Retrieved on December 27, 2011 from http://www.ireg-observatory.org/pdf/ranking_audit_audit.pdf
- (10) OECD (2011). *Testing student and university performance globally: OECD's AHELO*. Retrieved October 10, 2011, from: http://www.oecd.org/document/22/0,3746,en_2649_35961291_40624662_1_1_1_1,00.html
- (11) QS World University Rankings 2011/12 (2011). Retrieved October 10, 2011, from: <http://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2011>
- (12) Rauhvargers, A. (2011). *EUA Report on Rankings 2011: Global University Rankings and Their Impact*. European University Association.
- (13) THE World University Rankings 2011-12 (2011). Retrieved October 10, 2011, from: <http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/>
- (14) Usher, A. & Savino, S. (2006). *World of Difference: A Global Survey of University League Tables*. Educational Policy Institute.
- (15) van Vught, F. & Ziegele, F. (Eds.) (2010). *U-Multirank Design and Testing the Feasibility of a Multidimensional Global University Ranking: Final Report*. Consortium for Higher Education and Research Performance Assessment (CHERPA) -Network.
- (16) Wildavsky, B. (2010). *The Great Brain Race: How global universities are reshaping the world*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- (17) 小林雅之・曹燕・施佩君 (2007)『市場型と制度型大学評価の国際比較研究』東京大学大学総合教育研究センター
- (18) 樫本哲夫 (2011)「世界大学評価：最近の動向と問題点」『京大広報』No. 670, pp. 3488-3490
- (19) 深堀聰子 (2008)「AHELO 国際的な学習成果アセスメント OECD の試み」『アルカディア学報』No. 337. Retrieved October 15, 2011, from: <http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0337.html>

(京都大学国際交流推進機構国際企画連携部門・助教)

Trends and Issues of World University Rankings

Yuki Watabe

Abstract

It has been ten years since the first world university ranking was published in 2003. Used as a resource to assess the quality of universities around the world, the rankings have become increasingly popular. However, the methodologies used to create the rankings have been criticized for various reasons. Most importantly, there is a risk that the rankings could have a negative impact on the development of a diverse higher education system that is essential to the emerging knowledge-based society. As a result, scholars and experts in higher education have begun to re-examine how university rankings should be determined. Based on a literature review of five types of international university ranking systems, this article discusses the trends and the main issues involved in creating world university rankings.

World university rankings use league tables that evaluate the overall excellence of a university with a one-dimensional scale focusing on research. More recently, new ranking systems have emerged that aim to recognize the diversity of universities and compare their performance by using multidimensional approach. However, the biggest challenge continues to be the lack of internationally comparable data on higher education. As the globalization of higher education markets progresses, it is urgent that Japanese universities and the Japanese government develop systems to accurately present and deliver information on the performance of Japan's universities.

(Assistant Professor, Organization for the Promotion of International Relations,
Kyoto University)

